# 第１回福井県文化芸術推進会議　議事録

**日　時**　令和６年９月１２日（木）１３：３０～１６：３０

**場　所**　福井県庁 ６階 大会議室

**出席者**　委　員　※座長（県職員）を除き、五十音順・敬称略

青山直弘、朝倉由希、浅野桃子、小畑善敬、坂本紫崖、嶋田浩昌、
玉森慶三、友田堅七郎、長谷光城、畑中容子、水井推山、湊七雄、
猪嶋宏記（座長）

オブザーバー

青木英希（小浜市）、和田真生（福井市）

事務局

福井県　高校教育課　副部長（高校教育）　岡本 浩之
義務教育課　課長　山本寛
生涯学習・文化財課　課長志尾武章
文化課　副部長（文化）三武 紀子　他

## １　開 会

・座長あいさつ

## ２　議事

### （１）「福井県文化振興プラン」の実現に向けて

・資料１により、「福井県文化振興プラン」の概要について事務局から説明
・資料２により、福井県文化芸術推進会議の趣旨について事務局から説明
・資料３により、官民の協働による推進が必要なプロジェクトについて事務局から説明

### （２）意見交換

**［猪嶋委員（座長）］**

・県では、県文化振興事業団に事業団の中にアート振興部を置いて、県民の主体的な県民の主体的な文化活動を支援する体制を段階的に拡充してきた。
・このような方向性の下、事業団の今後の取り組みについて、現時点での事業団のお考えを県文化振興事業団専務理事の玉森委員からご説明いただきたい。

**［玉森委員］**

・県文化振興事業団としては、５つの方針に基づいて、県の文化振興プランの実現を図っていきたい。
・１つ目は「新たな文化の創造」。グローバル、多文化、インクルーシブなど、世の中で文化が果たす役割が重要になってきており、平和につながるような多文化、共生社会の実現に向けたプロジェクトに取り組んでいきたい。

・２つ目は「文化芸術によるクリエイティブな経済の活性化」。文化資源による福井の地域経済の発展に寄与するようなものを真剣に考えて取り組んでいきたい。
・３つ目は、「文化芸術実践者への支援」。これまで３年間続けてきたアートプロジェクトの活性化であり、新しいプロジェクトが県内各地で生まれている中で、それらに助言をしたり、つないだりするような伴走支援を強化していきたい。
・４つ目は、「未来人材の育成」。子どもたちが文化を楽しみ、文化に触れるチャンスを作っていくことに事業として取り組みたい。
・５つ目は、「県民による文化創造への機運醸成」。県民全員が文化に触れるためのイベントを開催するなど、文化芸術が溢れる福井の創造に向けた機運醸成のための事業を行っていきたい。

［猪嶋委員（座長）］
・資料３で例示している協働プロジェクトについて、ご意見やご提案をお願いしたい。
・県民主体の活動の振興を図るための「①総合型文化祭の開催」について、多彩な文化事業を実施している株式会社福井新聞社専務取締役の青山委員からご意見等をお願いする。

［青山委員］
・福井新聞社では文科系、スポーツ系合わせて、年間２００前後の主催・共催行事を実施している。また、年間２，６００～３，０００の後援行事にいろいろな形で携わっている。
・地元の皆さんや公的機関のご協力を得て実施しているが、そういう中で、最近特に、学校の先生方との連携が難しくなってきていると感じる。
・例えば、毎年実施している「福井県書初め競書大会」は、県内８～１０の会場において、その場で出された課題に挑んでいただく「席上揮毫」を特徴としてきたが、最近、先生方の働き方改革等の影響で、会場を借りることができなくなったことから、今年も席上記号は断念した。
・一民間企業がやっていることだから貸せないということであれば、県や教育委員会が実行委員会に入るなどして、福井県で長く続いている書道文化をさらに伸ばしていく一つきっかけにはできるのではないか。
・一方で、約５０年続けている「福井県版画コンクール」は根強い人気があり、支えてくださっている美術の先生方が大勢いらっしゃるのだと思う。そういうふうに学校現場の先生方といろいろ連携できたらと考えている。
・総合型文化祭については、開催するとなれば、ふさわしい場所、人員、大きな予算が必要になる。まずはその辺の課題をクリアしなくてはならない。県立美術館一つ見ても、地元作家を紹介する常設展があるわけでもなく、駐車場は狭い、収蔵庫は狭い、展示スペースも十分でない状態。そういうところから変えていかないと、とても総合文化祭は開催できないのではないかと心配している。ただ、何もできないと言うつもりは全く無い。各所と連携しながら、様々な形で取り組みは可能だと思う。福井新聞社としても、協力できることはさせていただきたい。

［猪嶋委員（座長）］

・続いて、多彩な文化活動を体験できる機会として、総合型文化祭を企画・実施されている福井県文化協議会会長の水井委員にご意見等を伺う。

［水井委員］

・県文化協議会では、昨年度、北陸新幹線の開業に合わせて、文化で機運の盛り上げを図れないかということで分野横断型の文化祭をハピリン・ハピテラスで開催した。

・県ではこれまで分野別の発表会に助成していたが、年数が経ってくると、当たり前の行事の一つになってしまい、来る人も出る人も変わらないという状況になった。そこで、県文化協議会では、誰が来ても楽しんでもらえる分野横断型の文化祭を実施しようと考えた。

・県文化協議会には音楽、芸能、生活文化など５つの分野があり、普段は別々に活動しているが、それらをコラボさせる演目を多数実施した。例えば、琴と尺八と三味線の演奏に合わせてバレエを踊る、琴と尺八の演奏の横で池坊の先生がお花を生ける、など。また、体験ワークショップも実施した。これまでは、音楽の発表会に行ったら音楽だけであったものが、書道や絵も体験できるということで、多くの人が参加してくれた。

・今年は、県からの依頼を受け、ふくい県民総合文化祭として、ハーモニーホールを会場に実施する予定。当初は、会員の中でも「ハーモニーホールでそんな催しができるのか」という話が出たが、何度も見学して、みんなでイメージを共有していった。最終的に出演者は７５０名ほどになる予定。

・正直なところ、資金面が大変ではあるが、実施すれば絶対に人は集まってくる。皆さんも機会があったら、ぜひ覗いてみてほしい。

［猪嶋委員（座長）］

・次に、「②アーティストデータベースの充実と活用促進」について、本日ご欠席の越のルビーアーティスト・松谷委員より事前にいただいているご意見を事務局からご紹介する。

［松谷委員］※欠席のため、事務局から事前にいただいたコメントを紹介

・アーティストデータベースについての意見として、「越のルビーアーティストバンク」はオーディション等で選定されたアーティストのみが登録されていて、派遣の依頼があった場合は県文化振興事業団がしっかりとマネジメントできる体制も整っている。一方、「文化芸術人材データベース」についてはプロ・アマチュア問わずに掲載されているので、演奏や指導などのレベルにかなりの幅がある。派遣の依頼があった場合もマネジメントができる人もいないので、依頼にきちんと応えることができないのではないか。

・このままの情報でマッチングに活用するとミスマッチが起こると思われるので、ミスマッチを防ぐために、登録アーティストが持つ資格や背景、何ができるのかといった情報をしっかりと掲載するべき。

・部活動の地域移行に対応するため、学校や地域がデータベースを活用することも考えられる。例えば吹奏楽は中学校から楽器を始める子どもが圧倒的に多いが、最初の教育が大変重要で

あり、そこにプロのアーティストが指導に関わることが必要と考える。学校や地域で子どもたちに吹奏楽などの指導を行う人材のデータベースになれば、活用も広がるのではないか。
・特別支援学校等における鑑賞機会の充実については、障がいのある子どもたちがアートに触れる機会は非常に重要なので、ぜひ充実を図ってほしい。
・子ども対象のコンサートについては、県内全ての小学５年生を対象に、県音楽堂におけるオーケストラ公演の鑑賞機会を作っていた「ふれあい文化子どもスクール」は非常に良い事業だったので、このような全国に誇れる次世代育成の目玉事業を実施しているといくとよい。
・アートキャリア講座については、アーティストの実演を鑑賞するだけではなく、講師となるアーティストがどのような道を歩んで今の位置に辿り着いたのか、どういう信念を持って歩んできたかを聞くことができる講座であるとよい。
・インバウンドについては、「世界の非常に美しいコンサートホール２５選」に日本国内で唯一選ばれた県立音楽堂は、開館以来２５年を超えて県の文化レベルを牽引する公演を行ってきた。世界に誇れる県立音楽堂での自主公演を絡めた旅行商品を作って、県の文化レベルのアピールにつなげるというのではないか。

［猪嶋委員（座長）］
・続いて、企業と県内アーティストの関わり方について、福井商工会議所専務理事の嶋田委員からご意見等をお願いしたい。嶋田委員には、「⑨文化芸術に関するＣＳＲ活動の活性化」における、企業の取組みについてのご意見等もお伺いしたい。

［嶋田委員］
・私たち企業に対する期待として、県内のアーティストの活用が一つあると思うが、「越のルビーアーティストバンク」「芸術文化人材データベース」を拝見したところ、ここからどのような活用ができるのかについて具体的なイメージが難しく、なかなかお願いしてみようという気にならない。
・例えば、最近は動画なども簡単にアップできるので、なるべく「このアーティストにはこんなことがお願いできるのか」というイメージが湧くようなものにしていただきたい。
・また、一番難しい問題はギャラで、「いくらとられるか分からない」というイメージをもたれがちである。書き方は非常に難しいと思うが、例えば２時間３万円くらいで来てもらえるということが分かれば、アーティストがぐっと身近な存在になる。データベースとしてきちんと載せていただきたい。
・文化芸術に関するＣＳＲ活動については、県文化振興事業団様と一緒に１０月から１２月にかけて３回シリーズで、ビジネスパーソンのための文化芸術セミナーを開催する予定。文化芸術は、社会人として教養というだけでなく、企業活動にも活かされていくと考えている。心理、ビジョン、美しさなど、文化芸術からゆるぎないものを学ぶことは企業にとって非常に良いことだと思っており、商工会議所としてもしっかり進めていきたいと思っている。

［猪嶋局長（座長）］

・続いて、「③アートプロジェクトによる文化芸術創造」について、公立小松大学准教授の朝倉委員に、文化政策の専門家として、改めてアートプロジェクトの意義や、アーツカウンシル機能の必要性などについてご意見等をお願いする。

［朝倉委員］

・アートプロジェクトは、日本では１９９０年代から美術を中心に起こってきた動きであり、美術館の白い展示室に作品を押し込めるのではなく、地域の歴史や風土などといった文脈の中に作品を持っていくというようなことが、今、各地に広がっている。
・出来上がった作品だけでなく、作る過程・プロセスを積極的に開示していく特徴をもつことが多く、芸術には関係ないと思っていた人が思わず巻き込まれるというような効果が起きたり、教育・福祉などの様々な分野とつながったり、そのような関係性を含めてアートと呼ぶというような動きが起きている。
・特徴の一つに、歴史や民俗的な特徴などをアーティストが発見し、表現していくことで、その土地ならではの地域資源が浮かび上がってくるというようなことがある。
・また、芸術のための芸術を少し批判的に見て、もっと一般の人も関わって作り上げるものをアートと呼ぼうということで、プロとそうでない人と間の境界を積極的に崩してきたのもアートプロジェクトの特徴である。
・アートプロジェクトには、地域の中に担い手が増えていくという意義があり、例えば、新潟の越後妻有や瀬戸内で実施している芸術祭では、芸術に縁遠いと思われていた地域のお年寄りなどがプロジェクトに関わり、何年か経つと滔々と芸術の意味を語るようになるというようなことが起こっている。
・「アーツカウンシル」も定義がなかなか難しいが、日本で今広がっている動きで言うと、地域の様々な文化活動を継続的、専門的に支援していくための組織と言える。地域のいろいろなアートプロジェクトの支援を行う際、補助金を渡すだけはなく、地域でどのような活動が地域で行われているのか、困りごとは何かなどをしっかりとリサーチし、実施団体等とよい関係を作って、効果的に実施できるよう伴走支援等を行うというもの。設置するのであれば、専門人材を置く必要がある。
・アートプロジェクトでは、県民文化祭のようなイベントも、大きな施設に集まって実施するのではく、県内各地で、その地域ならではのものをしっかり活かしながら実施している例がある。また、伝統行事のようなものとも親和性が高い。
・成果も大事だが、何が起こるかわからないものを実験的にやってみることも重要であり、萌芽、種のようなものをアートプロジェクトの枠組みで拾っていけるとよい。

［猪嶋委員（座長）］

・続いて、アートプロジェクトの今後の展開について、県の芸術文化アドバイザーとしてアートプロジェクトの支援に関わられている福井工業大学環境学部教授の浅野委員にご意見等をお願いする。

［浅野委員］

・アートプロジェクトだけに限らない話になるが、資料３の表を見ていても、①から⑩まで全体を通してつながりや関わり合いを生み出していくための仕組みや機会を作っていくという部分が抜け落ちているように感じる。
・アートプロジェクトに応募してくるような方々は、それぞれの活動については自発的にしっかりやっていけるはずなので、つながりや関わりをどう作るかの方が重要。
・活動者同士がお互いにお互いの活動を発信しあうことで、それぞれのプロジェクトが発展していくような、そんな新しいつながり合い方、出会い方、関わり合い方のようなものがあるとよい。

［猪嶋委員（座長）］

・続いて、「④多様な主体による創造・鑑賞活動の促進」について、障がいのある方たちが豊かに学びあう「若狭ものづくり美学舎」を運営されているＮＰＯ法人若狭美＆Ｂネット理事長の長谷委員からご意見等をお願いしたい。

［長谷委員］

・全国的に見ても福井県の取組みが進んでいる「子ども美術」と、逆にほとんど活動のなかった「障がい者アート」、そして、自分自身が一生懸命取り組んできた「現代美術」という３つの美術をコラボさせた展覧会を実施し。美術から見た共生社会を具体的に示したいということで、昨年度から「まるまるつながるアートてん まる」を開催している。
・昨年度は約２，０００人が来場し、専門家からは全国でも初めての試みということで評価を得ており、なんとかこれを続けていきたいものだと思っている。
・また、今、若狭芸術祭を開催しているが、やっていると徐々に地域から声が上がってくる。例えば、「美術館だけでなく熊川宿の中の空き家も活用し、散策しながら作品鑑賞等ができるようにしてはどうか」など。
・県は３年すると事業をやめてしまうが、やはり何かをしようと思うと、ある程度の年月が必要であることを理解してもらえると大変ありがたい。

［猪嶋局長（座長）］

・公立の文化施設も地域により一層開かれたものになるようにという期待が大きくなっているが、文化施設の運営者の立場から、福井県博物館協議会会長の友田委員よりご意見等をいただきたい。友田委員には「⑩伝統工芸・地域産業と文化施設等のコラボ」による新たな観光コンテンツの開発についても、ご紹介いただきたい。

［友田委員］

・私からは、県立施設を中心に、県内各文化施設での取組みについてご紹介させていただく。
・「④多様な主体による創造・鑑賞活動の促進」について、県立歴史博物館と美術館では、新幹線開業で外国人観光客が増えるということを見越して、スマホなどを利用して、外国語の音

声と文字でコンテンツを説明するというような設備を今年整備したところ。併せて、博物館協議会で運用しているホームページ「福井ミュージアムス」では、加盟している施設の情報を英語、中国語で説明する機能を追加した。

・障がい者や高齢者については、「まるまるつながるアートてん まる」の他に、県立美術館において団体への貸館を行う中で、さまざまな作品の展示場所を提供しているところ。また、博物館等へ来てもらうだけではなく、学校や公民館等へ出前講座も行っている。

・博物館法の改正もあり、資料収集、保存、展示といったことの他に、民間団体等々と連携してまちづくりや観光、産業などの役に立つことが求められている。また、収蔵資料のデジタルアーカイブ化も求められており、来館しなくても多くの方に収蔵資料を見ていただけることにつながるので、今後力を入れていきたいと思っている。

・「⑩伝統工芸・地域産業とのコラボ」については、例えば県立美術館では、今年度の横山大観展で、越前和紙の製作所の方と連携しての展示を行った。昨年の展覧会においても、紙漉き道具の展示や体験などを行っている。一乗谷朝倉氏遺跡博物館では、朝倉館の再現の中で花壇に和紙を使っている他、能舞台を能や狂言など、様々な文化活動に使っていただいている。

・少し変わった事例では、昔の駅弁を復刻したいという事業者に対して歴史博物館が収蔵していた昔の駅弁の掛け紙を提供し、復刻版の駅弁ができたということもあった。各施設に様々な収蔵品があるので、そういった収蔵品をうまく利用していただき、観光コンテンツ作りに役立てていただくということでも協力できると思っている。

［猪嶋委員（座長）］

・続いて、「（３）文化芸術を振興する次世代の育成」については、地域において継続的な鑑賞・体験ができる機会を拡充することが必要と考えている。まさに指導に関わられている福井県文化協議会副会長の坂本委員にご意見等をお願いしたい。

［坂本委員］

・福井県において、書道は確立されているが、絵画を教える先生は少ない。県文化協議会の加盟団体を見ても、書道団体は１７、１８あるのに対し、絵画団体は１０以下となっている。

・書道は小学校から高校までずっと触れる機会があるが、絵画はそうでないため、プロ育成までつなげることが難しい。絵画の先生方からは、県で助成をするなどして、プロを育成する機会を作ってもらえると大変ありがたいとのことであった。

・一口に文化と言っても大変幅が広いが、それぞれの分野でプロ意識を持った次世代を育てることが重要であり、福井で小さいころからプロになるための指導を受けた子どもたちが、県外の大学に行っても学びつづけ、いずれは福井に帰ってきて、新しい世代に伝えていくという循環が生まれるような一大プロジェクトがあると、大変良いと思う。

［猪嶋委員（座長）］

・ここで、オブザーバーとして参加いただいている福井市、小浜市からご意見をいただきたい。

・まずは福井市商工労働部歓呼文化スポーツ局の和田局長から、団体等が企画する次世代育成

に向けた体験プログラムなどについて紹介を含め、ご意見等をお願いする。

［福井市商工労働部観光文化スポーツ局長・和田氏（オブザーバー）］

・福井市では市文化協会の事務局を担っているが、会議などの機会を通じて、団体や文化活動の継続には次世代育成が欠かせないということを強く伝え、協会全体で注意を払っている。例えば、市文化協会の加盟団体には、子ども対象の体験会や公民館での教室を積極的に開催していただいている。

・今年度は、協会を主に「日本文化を楽しむ会」を立ち上げ文化に親しむ機会の提供をしているほか、国の補助を受けて、伝統文化団体による子ども体験授業を実施しており、各公民館で生け花、能、将棋などの教室を開催している。今年１０月から、日本ならではの茶道や短歌などに親しむための動画配信も試行的に開始する予定で、将来的には小中学校での学習や体験が可能となるよう進めている。

・次世代育成の課題としては、先生方の働き方改革等の現状を考慮すると、学校を巻き込んだ文化推進が困難になっているということがある。一方で、部活動の地域移行により、中学生が部活動に縛られることなく、幅広い文化芸術活動に参加する機会が得られるようになるとも思っている。

・また、小さい頃から文化に親しむためには、親世代が文化に興味を持つことが重要であるため、親世代への情報提供や、魅力的なプログラムの提供も今後の課題だと考えている。

・先ほどのアーツカウンシル機能の構築という話の中で、相談窓口の設置について述べられていたが、自治体としても相談できるところがあるのは大変ありがたい。事業実施していく中で必ずネックになるのが資金面であるため、補助メニューのご提供やご教示などをお願いしたい。

［猪嶋委員（座長）］

・続いて、小浜市産業部の青木部長に「⑥伝統行事等に参加しやすい環境づくり」についてご意見等をお願いしたい。

［小浜市産業部長・青木氏（オブザーバー）］

・小浜市では、文化財保存活用地域計画を令和２年３月に策定している。目指すところは、地域ぐるみで知恵と工夫を出し合い、文化財を活かした街づくりを進めること。

・その中一つの取組みとして、計画に基づいて文化財の保存活用の支援団体を指定する制度を設けており、地域の歴史文化を守る活動を行う民間団体、保存会、企業などを指定して、その活動を市がバックアップしている。現在、４団体を指定。

・指定団体のメリットとしては、活動に対して市から専門的なアドバイスや財政的な支援が得られるということ。また、まだ国の文化財に登録されていないものついて、市に登録を提案するよう要請できるようになる。さらに、重要文化財、史跡、名勝、天然記念物に指定されている土地などを支援団体へ譲渡する場合、譲渡所得の課税特例を受けることもできる。

・地域外との関わりについては、まちづくりに関心のある関西の学生が参加するインカレサー

クル「小浜Ｒキャンプ」があり、小浜の伝統行事や食のまちづくりについて研究等を行っている。伝統工芸についての研究をしている学生もおり、市の方で職人さんとのつなぎなどを行っている。

・観光客と伝統行事との関わりの部分では、小浜市のまちづくり観光会社が旧市街地の中にある古民家を改修して宿泊施設を運営しているが、そこの宿泊客をお祭りの夜の稽古を巡って体験をしてもらうツアーを実施しており、好評を得ている。

・民間からの応援もお願いしながら、様々な角度から地域の伝統行事等に関わる人を広げていきたい。

［猪嶋委員（座長）］

・伝統行事等については、観光活用をして、外から人を引き込むことで保存継承につなげることもあると思う。そういう視点も含め、福井県観光連盟専務理事の畑中委員にご意見等をお願いしたい。

［畑中委員］

・県観光連盟では、一年を通した誘客ということで、教育旅行やコンベンションの誘致に取り組んでおり、コンベンションについては、支援制度（助成金）も持っている。県内では、年間百数十件のコンベンションが開催されているが、文化系のものは少ないようなので、案件があればぜひ助成金など活用いただきたい。

・また、コンベンションの主催団体からは、アトラクションに出演してくれる伝統芸能や音楽の講師を紹介してほしいという話もよく聞く。県観光連盟のホームページにこれまで取り扱った一覧は掲載しているが、アーティストデータベースの制度がしっかり整った際には、ぜひリンクを貼らせていただいて、ご紹介していきたい。

・方言の活用については、教育旅行の誘致を行う中で、子ども達に宿泊してもらっている民泊の方々に積極的に福井の方言を使ってもらい、地域の伝統文化などについて説明してもらうとよいと思う。また、県観光連盟では市町の観光ボランティアガイド協議会の事務局を担っているが、県内に約２０の団体がある。そういう方々にガイドの際はぜひ方言を使うようお願いしてはどうか。

・福井に来る観光客の一番の楽しみは「食」。嶺南には食文化館があるが、福井ならではの食文化を伝える場所は少なくなっている。ぜひ福井の食文化を伝え、広げていく機会を増やすこともぜひ考えてほしい。

・新幹線福井駅の観光案内所を県観光連盟で運営しており、月に２、３回体験イベントを実施している。紙漉き体験やめのう、若狭塗り箸の体験なども定期的に行っているが、観光客だけでなく県内の方にも親しんでいただけるよう、引き続き努めていきたい。

・福井県の美術館や博物館は、観光地としてはまだ少しハードルが高く、気軽に来てもらう場所にはなっていないと感じる。ぜひ今まで足を踏み入れたことない方に来てもらえるような企画を実施して、敷居を下げていただくとよいと思う。

・インバウンド促進に向け、連盟の方にも今月から外国人のプロパーを一人採用した。県内に

住んでいるＡＬＴなど、国際交流のネットワークを作り、様々な発信も行っていく予定。やはり海外の方は日本の書道とか伝統芸能、伝統工芸などが好きだと聞いているので、ぜひ福井に住んでいる方から海外に発信してもらえるようにしていきたいと思っている。

［猪嶋委員（座長）］

・続いて、「⑨文化芸術に関するＣＳＲ活動の活性化」について、アーティストでもあり、また永平寺町でのＺＥＮ ＡＩＲや越前和紙の里での国際木版画ラボなど、様々なアートプロジェクトに携わっている福井大学教育学部教授の湊委員にご意見・ご提案をお願いする。

［湊委員］

・私自身、２００９年にＥ＆Ｃギャラリーという組織を立ち上げて、今は、Ｅ＆Ｃアートベースという名称で、企業とアーティストをつなげるような活動にも取り組んでいる。
・４月に開催した国際木版画会議では、海外から百人以上の参加を得たが、やはり体験を求めていることを実感した。そういう意味で、古き良き時代の日本の良さみたいなものが、福井県にはソースとして残っているので、まずは、我々がそれらを意識化するというところから始める必要があると思う。
・企業の文化芸術に関するＣＳＲ活動については、クリエイティブな人材と一緒に新しい価値を作っていく活動なのだと思う。ＣＳＲの成功事例を調べていくと、紹介されているのは大企業の取組みがばかりだが、世界的に見ると、中小企業の小さい事例もたくさんある。小規模でも意味のある取組み、長い持続性のある取組みというのは可能なので、この５年間の間に、ぜひ小さい成功事例を積み重ねていきたい。
・その最初の第一歩として重要なのは、人と人とが出会う機会を積極的に作っていくことだと思う。福井県は、ものづくりをするアーティストにとって住みやすい土地だと実感しているので、例えば年間１人、２人でもアクティブな創作者に住んでもらえるような状況を作っていくことで、人の輪が広がっていくと思う。

［猪嶋委員（座長）］

・最後に、「⑩伝統工芸・地域産業と文化施設等とのコラボ」について、ヒトモノデザイン株式会社代表取締役社長の小畑委員よりご意見等をお願いしたい。

［小畑委員］

・ヒトモノデザイン株式会社は２年前に設立した福井銀行の子会社であり、地域の発展という地銀の大理念に従って仕事をしている。福井にある地域資源を内外に売りに行くということを使命としている。
・福井県の人はやはりアピールが弱いと思う。誇りを持って発信してもらえば、次世代にも当然つながるし、観光客にもしっかり伝わる。
・地域を支えていく、伝統を支えていくことはお金が必要なので、少しでも経済的効果を生み出し、地域の活性化につなげたいという考えで取組んでいる。先日も農業体験を実施した際、

農家の方がお金はいらないとおっしゃったので、結局、バス会社と旅館だけが儲かるかたちとなってしまった。本来は主役の農業体験でしっかり利益をとってもらう形にすべきであり、そういう商品をどんどんこう増やしていきたいと思っている。

［猪嶋委員（座長）］

・委員の皆さんからご発言いただいて改めて感じたのは、やはり福井県は文化的なポテンシャルが高いということ。そういったポテンシャルが例えば教育旅行に繋がったり、いずれはインバウンドにも繋げられるのではないかと思う。
・福井はものづくりの県なので、自分の作品をお金に換算するというのが非常に苦手なところだと思うが、そこをうまくつなげられると活路があるのではないか。
・部活動の地域移行については、学校でやっている部活動の延長の活動なのか、それとも学校からは切り離すのかで全く意味合いが変わってくる。学校とは全く切り離すのであれば、学校の部活動ではスポーツをやっているけれども、土日は書道や絵画をやるということもありえるので、いろんな分野に子どもたちがチャレンジできる機会を作ることにつながる。今後も様々なところで意見交換をしていくとよいと思う。
・「知らせる」ということが福井県は非常に弱いと様々なところで言われている。今日いただいたよいご提案を我々がいかに発信し、取組みに反映させていくかということも課題であり、できるところから進めていきたい。

３　閉 会